

漢法苞徳塾資料	No. 041
区分	論説
タイトル	漢法医学と科学
著者	八木素萌
作成日	

視覚化したり厳密に条件設定を行なって再現性を確保する事・推計学的な解析処理に基づく理論構成・数学的に表現できる状況把握・これらが「科学的」である為の不可欠な条件であるだろうか？

人の身体の変調を治療することを仕事にする医学では、上のような考えで対応出来る分野はかなり限定されているのが事実である、それが近代的医学の臨床の実状である。

日本経絡学会 16 回学術大会で間中博士が、リン・ペイヤーを引用して各国の文化によって同一の病気に対しても対応が異なっている実状を明らかにした。

「正常の範囲」からやや外れていても本人にとっては何ひとつ問題はないし、そのことから予測されていた疾病も死亡するまで起らなかったケースも必ずしも稀ではない。また、精密な検査の結果何一つ異常がないと診断された人が短時日のうちに重病を患ったり死亡したりするケースもしばしば見聞する。これらは一体どう考えたら良いのだろうか？「正常の範囲」論を、検査に用いた「フルイの網の目」の程度の問題を、改めて問うべきであろう。

これらのような、現実的に運用されている場の状況は、科学的であると主張することができないものである事は明瞭である。このような世界なのに「科学的である」と言い張れる構造についても、科学史家・村上陽一郎は暴いている。

「……マクロな現象を、分析によってミクロな世界へ還元しようとする“科学”の論理は、医学においても、つねに、徹底的に行なわれる。病原体と病気との関係も、そうした論理の適用の結果でもあるし、免疫などの抗原・抗体反応を高分子レベルで解明することも、まさしくその結果の一つである。かくして医学は、立派に科学的ではないか。しかしながら、それで全部というわけにはいかない。病気はギリシャ語ではパテーマと呼ばれた。……パテーマとは“苦しみ”とか“苦しみを受けること”とかいった意味に関わる語である。……」

「…“苦しい”のと“苦しそうだ”とは違う。“痛い”と“痛そうだ”とは違う。“苦しみ”や“痛み”は“客観的”にはなり得ない。……とすればそもそも、“苦しみ”や“痛み”は“科学”の対象にはなり得ないのではないか。そんなことはない。痛みの作用機序はかなり判っているではないか。だが、ちょっと待っていただきたい。受容器としての神経細胞の膜の透過性が、刺激によって突然変化を起こす、するとイオンの平衡状態が崩れて、膜の内外に電位差が生ずる、――痛みは、そうした形で“科学的”に記述され説明される。だが、それが“痛み”なのだろうか。明らかにそうではない。“痛み”は主観の側の感覚の現象である。しかし前述のごとき“痛みの説明”は客観的物質現象である。われわれは、たとえ前述のごとき客観的現象が起こっていないとしても、主観の現象としては“痛んで”いる、という可能性を永久に排除できない。客観的には、その人の“痛み”は絶対に知り得ないものだからである。それゆえに、医学は、“科学的”であり得る

部分もあるが、しかもなお、永遠に、従来の歴史的規定の枠内での“科学的”ではあり得ないところが残ることは明らかである。……」

「……それぞれの領域における専門的な理論体系ができ上がって行く。その理論体系は、そのレベルよりも少なくとも一段階高次のレベルでの概念や法則を詳細、かつできる限り完全に記述・説明できるものである。だから、医学は科学的でないとはもちろん言えない。それにもかかわらず、医学は、その出発点において、患者の苦しみを取り除くという大前提を忘れるわけにはいかない。それを忘れたとき、医学は医学としての存立基盤を失うからである。……それゆえにこそ、医学者は自らの分科〈Fach〉に専門としての分析的な眼と頭とをもつと同時に、全体的な人間という統合的な視点を不可欠なものとして要求される。……」『近代科学を越えて』p111～p114)と指摘している。「…その最終的な目標が、ちょうど医学のそれが“患者のために”あるように、“人類のために”というところにはないのなら、人類の知的営みとしては、自己破産せざるを得ない。そして、科学は、まさにそこに統合化の視点をもっているはずなのである。具体的なプログラムとしては、“分析と統合”という“科学的な”思考法の前提を疑ってみる作業が必要であろう。それは“分析的である”ことを否定するのではなく、それ以外の自然現象への迫り方を“非科学的”として頭から峻拒してしまわない、という意味である。全体的な現象把握、現象を現象としてそのままとらえる、という方法をどこかで探さなければならない。というより、その発想を、すべての“分析”の出発点にしなければならない。“分析”は科学の一つの手段ではあっても目的ではないからである。目的を回復するための新しい発想が切に望まれているゆえんでもある。……」『前述書 p115』と述べている。

村上が此処に指摘しているのは、「現代科学」の“分析”と言う視点と、“基底還元”的な論理展開の方式とは、それを特長づけている「パラダイム」に他ならない。

医学を「科学的なもの」「実験医学」にする出発を作った、とされるクロード・ベルナールの「
」と言う考えから言えば、『三才思想』を展開した「東洋医学」は、ベルナールの的には「科学的」思想に立脚していると言って良いことになる。

結論一少なくとも医学においては「東洋医学」の論理の中に村上が求めている視点と方法論とがある。